

# 秋

僧侶 法頂(1932~2010)

訳 金 大烈神父

秋は本当に怪しい。  
少し落ち着いた心で、歩いて来た道を振り返ってみる時、  
生きる事って何だろうと、ひょいと独り言で呟いている時、  
私はいきなり優しい気持ちになる。  
落葉の様に、我らの心も薄い憂愁に染まって行く。  
秋ってそんな季節のようだ。

今は、どの空の下で、何をしているのか。  
遠く去っている人の安否が、気になる。  
深い夜、明かりの下で住所録を開いて、  
友の目もと、その声を思い浮かばせてみる。  
秋ってそんな季節のようだ。

真昼にはどんなに鷹揚おうようで硬い人でも、  
太陽が傾くと枯れ葉が転がる一つの音にも心を開く、  
そんな軟弱な存在であるのにすぐ気がつく。  
昼間は海の上の島のように別々に離れていた我らが、  
帰巢の時刻には、同じ大地に根を下ろしている肢体であることに  
初めて気がつく。

人が生きる事って何であろうか。  
分かるようで分からない問いである。  
我らに分かる事が出来るのは、  
生まれた者はいつか一回は死ななくてははいけない事だ。  
生者必滅(しょうじゃひつめつ)、会者定離(えしゃじょうり)  
その様な事であるのをよく知りながら、  
常にもの足りなくて、なごり惜しく聞こえる言葉である。  
自分の順番はいつになるのかを考えると  
瞬間瞬間をでたらめに、ぞんざいに生きたくない。  
出会う全ての人々に暖かい視線を送るべきだ。  
一人一人の顔を覚えておくべきだ。  
又違うある世の中の何処かで偶然に会える時、  
その名前を呼びながら手を握って嬉しさを交わせる為に  
今、ここで覚えておかななくてははいけないのだ。



人の間に横目でにらむ余力がどう出来るのか。

気が合わないと言って

獣のように歯向かうような愚かなことはしていないだろうか。

我らは憎みながら争う為に出くわした敵では無くて

互いに支えあい、愛しようと遠い遠い昔から求め会った隣人である。

この秋には全ての隣人を愛したい。

一人でも寂しくさせてはいけない。

秋は本当に怪しい季節である。